スポーツ科学における＜対象の個別性＞をめぐって

―スポーツ社会学におけるフィールド調査の視点から―

橋本政晴（信州大学教育学部）

キーワード：スポーツ科学，スポーツ社会学，フィールド調査，対象の個別性

「人間とは不思議な生物である。脳を肥大化させたおかげで、経験から同一性を抽出して法則化し、特殊を集めて一般化し、本来はすべてが一回性の偶然である自然の中に、因果律を生み出した。つまり自然（ピュシス）を論理（ロゴス）に変えた。…(略)…ロゴスの力で自然を、客観視し、外外化し、相対化した。」［福岡伸一，2021，「自然（ピュシス）の歌を聴け」，福岡伸一・伊藤亜紗・藤原辰史(編)，『ポストコロナの生命哲学』，集英社，3］。

１．問題提起――「体育・スポーツ・健康とは何か」という問いの駆動

コロナ渦で開催された2020東京オリンピックに対してスポーツ社会学では，開催それ自体が内包している諸問題や開催後の課題をめぐって，批判的な論考が上梓された．例えば，『検証コロナと五輪――変われぬ日本の失敗連鎖』［吉見俊哉（編），2021］，『東京オリンピック始末記』［小笠原博毅・山本敦久，2022］，『コロナとオリンピック――日本社会に残る課題』［石坂友司，2021］などがその代表格である．「社会とは何か」という社会学的にも根源的な問いを駆動し続けてきた内田［2005，『社会学を学ぶ』］が，「現代スポーツの社会性」［1999，『スポーツ文化を学ぶ人のために』所収］で俯瞰的に論じているように，今日の社会におけるオリンピックは，①莫大な資本，②高度なテクノロジー，③多様なメディア，④広範な観客，という四つの要素が複合して定位している．すなわちオリンピックは，もはや純粋無垢なスポーツイベントであることはなく，国際的な政治力学や都市の再開発と結託したグローバルな社会的・政治的・経済的なイベントとして屹立しているのである．

こうしてスペクタクル化されて開催された2020東京オリンピックに対して，人びとが抱く様々な違和感や異議を検証することは，スポーツ科学においてはあまり好まれない．なぜなら，2020東京オリンピックを「社会問題」として捉えるこれらの諸論考は，最終的には「スポーツとは何か」という問いを，スポーツ科学者たちに突き付けてくるからである．

『健康不安の社会学』［上杉，2000］や『現代人にとって健康とはなにか』［竹内(監修)，2011］の論者たちは次のように言う．「スポーツは健康に良い」という神話は社会的に創り上げられ，そのことによってスポーツの意義が狭隘化されていると．『身体教育の社会学』［ましこ，2019］や『真正の「共生体育」をつくる』［梅澤・苫野(編)，2020］の論者たちも次のように言う．身体能力を涵養している学校体育は，特定の身体技能を評価対象とすることで格差と排除を可視化することに与していると．「健康」や「体育」というテーマに対しても手厳しいスポーツ社会学は，スポーツ科学においては全く居座りが悪い．なぜなら，スポーツ科学に対して，「健康とは何か」，「体育とは何か」という問いを突き付けてくるからである．

２．スポーツ社会学的フィールド調査における＜対象の個別性＞をめぐって

スポーツ社会学への不快感は，「そもそもスポーツ・健康・体育とは何か」という根源的な問いをスポーツ科学に対して突き付けてくることから生じているのだが，ではそこからのブレイクスルーはどのようにして可能なのだろうか．本報告では，「目の見えないアスリート」への聞き取り調査をベースにして，「障害があってもできるスポーツ」ではなく，「障害があるからこそ出てくる体の動きや戦略を追求する活動」として障害者スポーツを捉えている伊藤［2016，『目の見えないアスリートの身体論』］の諸論考から検討を行う．

美学者でもある伊藤は，生物学者・本川達雄の『ゾウの時間ネズミの時間』を参照しながら，「時計の時間」を＜情報＞，「個々の生物にとっての時間感覚」を＜意味＞に対応させた場合，＜情報＞をベースにした障害者との関わり方は「福祉的な関係」に限定されてしまうことの問題を指摘する．そこには，「見える人が見えない人に必要な情報を与え，サポートしてあげる．見える人が見えない人を助けるという関係」［伊藤，『目の見えない人は世界をどう見ているのか』，2015，35］がある．そのように固定化された関係では，健常者を優位に，障害者を劣位に立たせてしまうのではないか．ここから伊藤は「目の見えない人／目の見えないアスリート」の＜意味＞へとアプローチしていくのだが、ここには対象との関わりの中で，「そもそも障害とは何か」という問いが駆動している．なぜなら，＜対象の個別性＞さらには＜対象との関わりの個別性＞を志向する＜個別性の哲学＞＞を試みているからである．